『外地の三人姉妹』について

◎初演の情報

2020 年 12 月 12 日～ 20 日　KAAT（神奈川芸術劇場）

原作：アントン・チェーホフ『三人姉妹』
翻案・脚本：ソン・ギウン
演出：多田淳之介
ドラマトゥルク：イ・ホンイ
翻訳：石川樹里
美術：乗峯雅寛
照明：岩城保
音響：星野大輔
衣裳：阿部朱美
ヘアメイク：国府田圭
演出助手：相田剛志
舞台監督：橋本加奈子　小金井伸一
出演：伊東沙保　李そじん　亀島一徳　原田つむぎ　アン・タジョン　夏目慎也　高橋ひろし　大竹直　田中佑弥　波佐谷聡　松﨑義邦　イ・ソンウォン　佐山和泉　鄭亜美
協力：第 12 言語演劇スタジオ
企画製作・主催：KAAT 神奈川芸術劇場　一般社団法人 unlock ／東京デスロック
助成：芸術文化振興基金 | 公益財団法人日韓文化交流基金

◎掲載台本について

2020 年 12 月上演台本のうち、台本冒頭の登場人物と表記に関する説明、そして第一幕 1 場から 4 場までを部分掲載いたします。
実際の公演では、一部の台詞は方言に変えて上演されました。

外地の三人姉妹
외지外地의 세 자매

脚本：ソン・ギウン（成耆雄）
翻訳：石川樹里

（原作：アントン・チェーホフの戯曲『三人姉妹』）

 # 時間

1935 年（昭和 10 年）春から、1942 年（昭和 17 年）秋まで

 # 空間

朝鮮半島の北東部の都市「羅南」にある日本人一家の屋敷。※1
この屋敷の母屋は洋風の二階建て家屋となっており、母屋とつながっている離れは日本風の家屋で、やはり二階建てである。

 # 登場人物（年齢、階級などの情報は、第 1 幕を基準とする。年齢は満でかぞえる。）

［福沢一家］

福沢庸子（ふくざわ　ようこ ←原作『三人姉妹』のオーリガ）
長女。20 代後半。

※1　羅南（らなん／ナナム）は朝鮮半島の東北部、咸鏡北道の日本海（朝鮮半島では東海と呼ぶ）沿岸にある都市だ。中国との国境をなす鴨緑江から約60km、ロシアとの国境である豆満江からは約100km離れている。ロシアのウラジオストクとかなり近い。日露戦争後、日本陸軍第19師団司令部などの軍隊が駐屯することになって、大きな軍事都市となり、鏡城にあった道庁がここに移されて咸鏡北道の道庁所在地となった。都市の中心から放射線状に道路が伸びる計画都市であり、赤いレンガで建てられた軍隊の建物が立ち並んでいたという。今は、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の大きい工業都市である清津市の一部に編入されている。

普通学校※2の教師。

倉山昌子（くらやま　まさこ ←マーシャ）
次女。20代半ば。倉山銀之助と結婚して倉山姓となった。
この屋敷の近所に住んでいる。
マーちゃんと呼ばれることもある。

福沢晃（ふくざわ　あきら ←アンドレイ）
息子。20代半ば。
第1幕の後、董仙玉と結婚。

福沢尚子（ふくざわ　なおこ ←イリーナ）
末っ子。20歳。
昨年、女学校を卒業した。愛称は尚ちゃん。

董仙玉（トン・ソノク、とう　せんぎょく ←ナターシャ）
この地域の朝鮮人有力者の娘。19歳。
晃の恋人で、第1幕の後、晃と結婚。

倉山銀之助（くらやま　ぎんのすけ ←クルィギン）
昌子の夫。30代前半。中学校※3教師。「銀ちゃん」と呼ばれている。
朝鮮で生まれ育った。

［軍人達］

千葉哲人（ちば　てつじん ←チェブトゥイキン）
50代。日本の陸軍軍医。

※2　「普通学校」は小学校に当たる。朝鮮人の子どもたちが通う四年生の学校を普通学校と呼び、朝鮮で暮らす日本人の子どもたちが通う六年制の学校を尋常小学校と呼んだ。1938年の第3次朝鮮教育令によって、普通学校もすべて六年制の尋常小学校に統一され、いわゆる「内鮮共学」（内地人と朝鮮人が一緒に学ぶという意味）となり、朝鮮の言葉と文化を教えない教育政策が実施された。1941年には尋常小学校が「国民学校」と改称された。

※3　当時、朝鮮の「中学校」とは内地人（日本人）の男子生徒が通っていた5年制の学校で、現在の中高校課程に当たる。朝鮮人は「高等普通学校」に通うことになっていた。 1938年の第3次朝鮮教育令により中学校と高等普通学校は中学校に統合された

官舎に住まわず、福沢家の離れで暮らしている。
第4幕では退役している。

磯部史郎（いそべ　しろう ←ヴェルシーニン）
40代前半。日本陸軍中佐。
少し前に羅南の師団司令部に通信参謀として赴任した。妻と二人の娘と一緒に暮らしている。
東京出身。
第3幕の時点では大佐に昇進している。※4

朴智泰（ぼく　ともやす、パク・ジテ ←トゥーゼンバフ）
20代半ば。日本陸軍中尉。第3幕からは退役している。
朝鮮人の父と日本人の母を持ち、主に日本で教育を受けて育った。日本による朝鮮の強制併合に協力した祖父から日本の男爵の称号を譲り受け、日本の陸軍士官学校を卒業した。
福沢家の離れに下宿している。
第4幕では、創氏改名をして「新井智泰（あらい ともやす）」となる。※5

相馬僚（そうま　りょう ←ソリョーヌイ）
20代半ば。日本陸軍中尉。
この屋敷に頻繁に出入りする朴智泰の同僚。
言葉には九州地方の強い訛りがある。

木戸伝平（きど　でんぺい ←フェードチク、ローデ）
20代前半。日本陸軍伍長。衛生部所属。第3幕からは、軍曹に進級している。
東北地方の強い訛りがある。※6

※4　この戯曲の中で、磯部中佐や相馬中尉は、7年間余り勤務地が変らず、ずっと「羅南」で勤務しているわけだが、これは当時の日本軍将校の勤務慣例に照らせば、異例のことだろう。彼らの希望が受け入れられ、他の地域に転出しなかったと設定してみた。その間、第19師団内で彼らの所属部隊や補職は変わった可能性がある。

※5　朝鮮総督府は1940年からいわゆる「創氏改名」政策を開始し、次第に積極的に推進していった。朝鮮式の姓名の代わりに日本式の姓名を付けろというこの政策は、いわゆる「内鮮一体」、朝鮮人に対する皇国新民化政策の一環として考案されたものだ。

※6　羅南に駐屯していた日本陸軍第19師団の兵隊は、関東、中部、東北南部から徴集された。城戸伝平は兵卒ではなく下士官だが、やはり東北出身という設定にした。

［それ以外の人々］

黄斗伊（ファン・ドゥイ ←フェラポント）

中年の朝鮮人男性。

道議会議員である矢内原家の下男。※7

サヨ（ ←アンフィーサ）

70代の女中。

三人姉妹、晃の亡き母が結婚する時に実家から連れてきた女中。母が亡くなった後もずっとこの家で働いている。

ひどい訛りでしゃべる。

カンナン

若い朝鮮人の下女。

「カンナン」という名は、「赤ん坊」という意味で、幼名のようだ。

董仙玉の実家からついて来て、第2幕以降、福沢家の屋敷に住み込みで働くようになる。

言葉に関する設定と記号

董仙玉と黄斗伊、カンナンは咸鏡道の人で、韓国語でしゃべる時は現地の方言を使う。

咸鏡［ハムギョン］北道の方言は、韓国語（＝朝鮮語）の中でも特にアクセントが強い。咸鏡道地方の人の気質も生活力も強く、感情の起伏が激しいので、彼らのしゃべり方は、まるで激しく怒っているように聞こえることがある。

董仙玉は学校で日本語を学んだが、構文や発音が完璧ではない。日本語で話す時、乱暴だったり、礼儀が悪いという印象を与えることもある。

黄斗伊は、董仙玉より日本語がはるかに下手だ。第4幕では少し上達している。

カンナンはほとんど日本語を話さないので、どのくらい日本語を理解しているのかわからない。この家に来たときは日本語が全くできなかったが、第4幕の時点ではかなり聞き取れるようになっているかもしれない。

※7　「道会」は日本による植民地時代に、朝鮮の13の道に設置された地方自治体の議会に該当する機構である。最初は各道庁の諮問機関として設置されたが、後に議会形式で運営された。しかし権限はきわめて制限的だった。この戯曲では便宜上、主に「道議会」という名称を使用する。晃は第3幕で咸鏡北道会議員になり、議長だった矢内原は、第4幕では議長になっているという設定である。

主に日本で教育を受け、日本陸軍士官学校を卒業した朴智泰は、日本語を使うのに問題はないが、たまにどもったり、自信なさげなしゃべり方をすることがある。それは日本語が母語でないためかもしれないし、それとも性格や心理的な問題のせいかもしれない。劇中では韓国語をほとんどしゃべらないため、どのくらい韓国語に通じているのかわからない。 朴智泰のアイデンティティに関しては解釈の余地を残したいが、朝鮮（韓国）で生まれはしたが、主に日本で育ったため、韓国語はあまり流暢ではないという設定にした。母方の実家が京都のほうだという設定なので、幼い頃は関西で育ったとも考えることもできる。

朴智泰と福沢尚子はエスペラントで会話することがある。言語間のヒエラルキーに反対する人工言語であるエスペラントは、特に当時の無政府主義者の理想に見合った言語だった。朴智泰は一時、無政府主義など、左翼的な思想に憧れたかもしれないが、この劇の中では彼が政治的にどのような思想を持っているのかについてはわざとぼやかしている。とにかく彼は一つの政治思想にのめりこむというよりは、終始、世界観やアイデンティティの混乱を経験する人物であると言える。

他の日本人の登場人物は出身地域などの背景によって、それぞれ言葉遣いが少しずつ違ったほうがよい。

磯部史郎は特に洗練された都会の言葉を使い、話しもうまい。彼の言葉に刺激され、三姉妹は東京に対する郷愁や憧れを抱く。

朝鮮で生まれた倉山銀之助は、特別な方言を使わない。

サヨの言葉は訛りがひどく、また年を取っているせいもあり、聞き取りにくいほうが良い。

ボク・トモヤス（朴智泰）とトン・ソノクの名前は主に日本式の読み方で「ボク・トモヤス」、「センギョク」と呼ばれる。一方、尚子と晃は仙玉を朝鮮語式の発音「ソノク」、ボク・トモヤスを「パク中尉」、「パクさん」、「ジテさん」などと呼ぶようにした。 この二人は朝鮮の人々の言語や文化を認めるべきだという考えを持っているからだ。だからといって、尚子や明に朝鮮人に対する優越感や差別意識が全くないと設定したわけではない。彼らが朝鮮人の名前を朝鮮式の発音で呼ぶのは、朝鮮人と自分たちを区別しようとする意識、または無意識が込められているかも知れない。

複雑な言語駆使の様相を表示するため、日本語ではない言葉で話される時は、台詞に次のような記号をつける。

- ［Kr］：韓国語（朝鮮語）
- ［Ep］：エスペラント
- ［En］：英語
- ［Gm］：ドイツ語

外国語を使用した後に、再び日本語で話す場合は、［Jp］と表記する。

日本語の台詞の中に、他の言語の単語を混ぜて話す場合には、その単語を、イタリック体と下線で表示する。

韓国語の台詞に日本語の単語を混ぜて話す場合にも、同じように表記する。※8

また、次のような記号も使用する。

- * ：ひどい訛りで喋っていることを表す。
- ** ：自分の母語ではない言葉で（たとえば、朝鮮人が日本語で）たどたどしくしゃべる。
- @：日本語の慣用的な挨拶。［韓国語台本のみ表示］
- # ：他の会話が進んでいる最中に、重ねてしゃべる台詞。

＊この戯曲はソンギウンが韓国語で書き、石川樹里が日本語で翻訳した。
韓国語原稿の台詞は、多少ぎこちなく不自然に感じられるかもしれない。それは日本語に翻訳されることを予め想定して書かれているためだ。ある台詞は、日本語に翻訳されたニュアンスを再び韓国語の原稿に取り入れたり、翻訳者から提案された日本式の表現や文化を反映させた。

※8　この戯曲では当時の韓国語を「朝鮮語」あるいは「朝鮮言葉」と呼ぶ。

第1幕

1935年4月下旬の日曜日。
正午。
福沢家の屋敷の、西洋式建築で建てられた母屋の1階。
応接間のガラス戸が開いており、庭の一部が見える。庭には春の兆しが感じられる。
応接室の片側には、玄関に通じる廊下があり、その反対側には、台所や離れなどにつながる廊下がある。また、応接室から2階に上がる階段が見える。
庭には玄関の戸から出ることもでき、離れにつながる廊下にある別の戸から出ることもできる。

1

柱時計が正午を知らせる。
庸子が、生徒たちの綴り方の宿題を採点している。
昌子は庭に近い場所で本を読んでいる。彼女は黒地の着物を着ている。
白いワンピースを着た尚子は、オルガンの前に座っている。
庭の食卓に昼食を整えるために、サヨが出入りするのが見える。

庸子: やっと春ね。
日差しが暖かい。

尚子、オルガンのペダルを踏んで、いたずら半分にスースーと空気の抜ける音を出す。

庸子: あの日は本当に寒くて、4月なのに、みぞれが降ったよね。
ここでお通夜をしてる間に雪に変わっちゃって…ほら、みんなで外に出て、
雪かきしたでしょう、夜中に何度も。弔問客はほとんどいなくって。
やっぱり、お父様は退役した後、すぐ帰るべきだったのよ、東京に。
そうしたら治療だって、もっとちゃんと……。

尚子、オルガンで『乙女の祈り』のメロディーを弾きはじめると、門のほうで人の気配。
千葉と相馬の笑い声。

千葉（声）：　おい、よせ、馬鹿なこと言うな。
智泰（声）：　ただいま戻りました。
庸子:　お帰りなさい。
千葉（声）：　おーい。
相馬（声）：　*[九州弁]お邪魔します。
昌子:　いらっしゃい。
　#庸子:　相馬少尉さんもいらっしゃったの。
　#相馬:　*もう少尉じゃありません。中尉です。
尚子:　お帰りなさい。
　でもずいぶん遅かったじゃない、どこ行ってたの？
智泰:　うん、ちょっとね…。
千葉:　まあ、いろいろあるんだ、男には。
　#相馬:　（尚子を見て）　*あれ、その服。もう着替えたんですか？
　#庸子:　素敵でしょ？
尚子:　どうせまた麻雀でもやってきたんじゃない？
智泰:　いや、違いますよ。
千葉:　まあ、いいじゃないか、今日は休みなんだし。
　#相馬:　お言葉に甘えて、お昼をご馳走になろうと思って。
　#庸子:　ああ…どうぞ、どうぞ。
千葉:　それじゃ、また後で……失礼。
庸子:　ごゆっくり。
尚子:　ごゆっくり。
相馬:　*失礼。

千葉と朴智泰、庭を横切って、離れの方に行く。

千葉（声）：　あれ、「ツツジ」って、朝鮮語でなんだっけ？
智泰（声）：　えーと、なんでしたっけ……。
相馬：　（へたな短歌を詠む）* 北鮮の / 二十（ハタチ）の庭に / むら咲ける / ツツジに戯むる / 胡蝶が三羽
智泰:　（相馬のかわりに謝り）　すみません。

智泰、戻ってきて、相馬をつれて、再び離れのほうへ消える。

庸子:　やっぱり、お父様はすぐ帰るべきだったのよ、東京に。退役した後…。

昌子、口笛で『乙女の祈り』のメロディーを吹き始める。

庸子:　尚ちゃん、その服、よく似合ってる。顔が明るく見えるわ。
（昌子に）これも通信販売で買ったのよ。
昌子:　（口笛をやめて）　大阪の大丸？[※9]
庸子:　ううん、京城の三越。[※10]
尚子:　ねえ、お姉さん、東京にはいつ帰るの？
お父様の遺骨をお墓に入れてあげなくちゃ、お母さんと一緒のお墓に。
庸子:　うん、そうしないとね…。

昌子が吹いていた口笛のメロディーが『東京節』に変わっている。[※11]
尚子も昌子の真似をして口笛を吹こうとするが、うまく音が出ない。

庸子：　やめてよ。女が口笛吹くなんて、はしたない。

尚子、オルガンに行き、『東京節』のメロディーを弾き始める。

庸子:　まるで昨日のことみたいなのにね。東京を離れた日のこと。
4月のはじめ頃…。ちょうど新学期が始まったばかりだったから。
尚ちゃん、あんた、駄々をこねたよね。新しく作ったセーラー服をどうしても着て行くんだって。
軍のジープで目黒駅まで行く途中…あの時はまだ東横線はあそこまでだったから。見上げると、青い空に桜の花が真っ白に……。

尚子と昌子、『東京節』を一緒に歌う。
最後には庸子も加わる。

※9　当時、羅南に住んでいた日本人は大阪の大丸百貨店から通販で衣類を購入していたと言う。（洪郁如・田原開起、「朝鮮引揚者のライフ・ヒストリー　―成原明の植民地・引揚げ・戦後」）

※10　当時、京城の三越百貨店から朝鮮各地に通信販売を行っていた。（木村健二,「朝鮮居留地における日本人の生活態様」,『一橋論叢』 第115巻 第2号（1996年2月号）, p.42-62.）

※11　別名『パイのパイのパイ』。アメリカの『ジョージア行進曲』（Marching Through Georgia）のメロディーに新しく歌詞をつけて歌われた俗謡で、日本では1918年に発表され大流行した。平田オリザの『ソウル市民1919』の最後の場面では、この曲を『京城節』として、歌詞を替えて歌っている。

2

智泰が離れの方から現れる。
三人姉妹は歌を歌い続ける。

智泰:　さっき言い忘れました…。
あとで、新しく赴任してこられた磯部中佐殿が、こちらにご挨拶に伺うそうです。構いませんか？
庸子:　へえ。もちろん。
智泰:　午前中の法要にも参列したいっておっしゃってたんですが、昨夜は当直で、たぶん…。
尚子:　中佐殿って、かなり年配の方？
智泰:　ええ。いや、どうかな。なんだか、こちらのお宅となにか縁がおありだそうですよ。
庸子:　へえ、そう？
智泰:　いい方ですよ。ただちょっと話が長くてね、一度話し始めると…。
尚子:　へえ。
#千葉（声）:　朝鮮の女は、朝起きると顔を洗ふよりも先づ髪の毛の手入れをする。
相馬:　お邪魔します。
#千葉（声）:　朝鮮櫛でフケをとり、椿油を…。
一週に一度は必ず髪を洗い、
#相馬（声）:　なんです、それ？

相馬と千葉、離れの方から出てくる。
千葉は新聞を読みながら歩いて来て、ソファに座る。

千葉:　抜毛を防ぐために、わかめを愛食する。
相馬:　*お邪魔します。
千葉:　けれど今は、この悩みは簡単に解消する。良質の養毛剤「養毛トニック」！※12
相馬:　*ああ、なんだ…。
尚子:　私は今朝、起きてすぐ顔を洗ったけど。髪は昨日美容室で洗ってもらったから。

※12　『日本雑誌　モダン日本と朝鮮1939』（語文学社、2007）影印本22-23、翻訳本33ページに掲載されている養毛剤「養毛トニック」の広告文案を参考にした。1935年時点にはこの養毛剤がも発売されていなかったかもしれない。

千葉:　さすがモダンガール。衛生管理は徹底してる。
尚子:　ねえ、おじさん、私ね、今日、新しく生まれ変わったような気分なの。
これから働くわ。毎日、家でだらだら、ごろごろするのはもうたくさん。
怠け者のご令嬢なんかより、勤勉な労働者になる。ばりばり働く女性。
庸子:　あんたが？
昌子:　この前は、暖かくなったら放浪したいって言ってなかった？※13
相馬:　*ええっ？
智泰:　労働の価値。崇高なものです。
そう言う僕も、これまで一度も労働らしい労働をしたことはありませんが。
庸子:　貴族のご出身ですもの。
智泰:　恥ずべき家柄です。いろんな意味で。
#相馬:　*裏切者の「合いの子」。
尚子:　ひどい、そんな言い方。
#千葉:　おやっ？なにか聞こえなかったかね？
#庸子:　さあ。
千葉:　しいっ。

外からなにか音が聞こえるような気もする。

千葉:　ちょいと失礼。
いってきます。

千葉、玄関の方に出ていく。

尚子:　なんか怪しい。
庸子:　そうね。
智泰:　なんか、下手な道化師みたいですよね？

昌子、立ち上がって、羽織を脱いで置いた場所に近づく。

庸子:　昌子。どこ行くの？

※13　1930年、日本のベストセラーのなかに女流作家・林芙美子の小説『放浪記』がある。東京に暮らす若い女性が私生活の面で彷徨する様子が描かれている。また、関東大地震（1923年）以後、急速に変化する東京の風俗が描かれている。

昌子:　そろそろ帰るわ。
智泰:　え、でも、お祝いがまだじゃないですか。尚ちゃんの誕生日の…、
昌子:　また夕方来るから。
尚子:　お姉さん。

3-a.

玄関の外の方からサヨの声が聞こえる。

#サヨ（声）:　*[大阪弁]いらっしゃい、こっちに。
（間）ちがうちがう、そっちじゃない。こっち。足、汚れてるでしょ。
#斗伊（声）:　ああ、はい。

サヨが庭の方から現れる。
後から、日本風の服装をした黄斗伊が現れる。

サヨ:　*あの、矢内原さんのとこから人が…。
庸子:　ああ…。
斗伊:　**あのう、失礼します。これ…。

黄斗伊、贈り物を差し出す。

斗伊:　**「福沢さんとこ、え……、これ持ってけ。オーケー？」
庸子:　ええっ？
サヨ:　*バナナ羊羹じゃありませんか？ミズノ商店さんの。※14
昌子:　一周忌のお供え物かしら？
庸子:　まさか。

尚子:　それじゃ、私の誕生日の贈り物？
さっき、お寺で聞いたんじゃない？

※14　当時、咸鏡道（ハムギョンド）のある港町の特産品として「バナナ羊羹」があったらしい。『在朝日本人の国境の憂鬱』（訳楽、2015、韓国語）101頁に出ている『朝鮮と満州』1923年9月号に掲載された文章の内容を参考。

斗伊:　　**ながに…、なにが、 ながい？※15 な…みるな、はいはい……。
相馬:　　（黄斗伊のしゃべり方を真似て） *中に…、まさか、爆弾？
斗伊:　　**はい？
相馬:　　*ドッカーン！

間。

智泰:　　（相馬のかわりに謝る） すみません。
庸子:　　（黄斗伊に） 矢内原さんに、「ありがとうございます」と伝えて下さい。
斗伊:　　……**はい？
庸子:　　（サヨに） あの人に飴でも一つあげて、帰して。
サヨ:　　*さあさ、こっち、こっち。
斗伊:　　**はいはい。
　　さよなら。

サヨ、黄斗伊を案内して下がる。

尚子:　　開けてもいいかしら？
庸子:　　矢内原さん、どうしてあんな人を使ってるのかしら？
昌子:　　あんな人って？
庸子:　　ほら、朝鮮人。あんな、言葉もしゃべれないような。
相馬:　　*朝鮮人には、朝鮮服を着せてほしいもんですよ。
　　じゃないと、なにがなんだか訳が分からなくなる。
（間）それもしても、バナナ羊羹か…。

※15　ここで黄斗伊は、日本語が上手くしゃべれず混乱して、似たような発音の言葉を羅列している。昔、韓国人が日本語を話す時、第2音節が濁音になる傾向があったことを反映し、‘Nakani’を‘Nagani’と発音するようにした。「中に、なにか、長い…」と言おうとしているのだが、相手には意味がよく伝わらない設定である。

3-b.

表の門のほうから、チンドン太鼓の音が聞こえてくる。

智泰:　あ、来ましたよ。

千葉が、チンドン太鼓を叩く木戸と一緒に出てくる。
木戸、「朝鮮北境警備の歌」を歌っている。

木戸:　*♪此処は朝鮮北端の*
二百里あまりの鴨緑江
わたれば広漠　南満州…
#尚子:　え、ちょっと、これ……千葉のおじさん！
木戸:　*♪極寒零下三十度　／　卯月 半ばに雪消えて　／夏は水沸く百度余ぞ…*
千葉:　（弁士のような口調で）東西、東西（とざい、とうざい）！
夜空の星も凍る北の果て、異国のこの土地にもついに春がやってまいりました。そして本日、めでたく二十歳になられました福沢尚子嬢のお誕生日を、心よりお祝い申し上げます。
木戸:　*[東北弁]お祝い申し上げます！

木戸、尚子に贈り物を渡す。

尚子:　え、これ……。
庸子:　贈り物、何かしら？
#木戸:　*♪務むる吾等同胞（はらから）の/安き夢だに結び得ぬ/警備の辛苦誰か知る～*
智泰:　（下手な口上で）はるか遠く、シベリア横断列車で運ばれてきた最高級…。
昌子:　フランス製？
千葉:　**[Rs] 万歳！[ウラー！]
#相馬：　（下手な短歌を詠むように）　*柔肌に/若さあふるる/大和撫子/舶来の/紅は似合わず…
庸子：　えっ？
#木戸:　*♪河を渡りて襲い来る/不逞（ふてい）の輩（やから）の不意打ちに/妻も銃とり応戦す…*

尚子:　　おじさん、これ、今の私の思想信条に合わないから…、※16
智泰:　　やっぱり。
昌子：　　うーん…。

サヨが玄関側の廊下から入ってくる。

庸子:　　高価な物みたいよ？
尚子:　　だから余計。
#サヨ:　　*あのう、まただれかいらっしゃいましたけど。
#庸子:　　今度は誰かしら？
昌子:　　おサヨさん、お客さんを勝手に通さないで。
サヨ:　　*はい、でも、今度の方は軍人さんですよ、（ジャスチャーで）なんだかこんな。
庸子:　　こんなって？
智泰:　　ああ、磯部中佐殿じゃ？
庸子:　　ああ、それじゃ早くお通しして。

サヨ、再び玄関の方に出て行く。
朴智泰もそっちに出て行く。
庸子、応接間のテーブルに置いてあった生徒達の宿題を片付ける。

千葉:　　（木戸に） まあ、ご苦労さん。
木戸:　　*すんません。
千葉:　　思ったより下手くそだな。
木戸:　　*すんません。
千葉:　　まずはこっちに退散。
木戸:　　*すんません。
千葉:　　手間はあっちで払うよ。
木戸:　　*すんません。
#磯部（声）：　　失礼します。
#智泰（声）：　　どうぞこちらに。

千葉と木戸は離れのほうに去る。

※16　フランス製の化粧品をプレゼントしたという設定で書いた。

4

朴智泰が再び現れ、後ろから磯部が入ってくる。
相馬、磯部に敬礼する。
サヨは再び応接間を通って、台所の方に去る。

磯部:　突然お邪魔しまして、恐縮です。
庸子:　いえ、お待ちしておりました。
智泰:　この度、師団司令部に赴任なさった磯部史郎中佐殿です。
庸子:　ようこそいらっしゃいました。
磯部:　たいへん光栄です。ようやくこうして……。
昌子:　はじめまして。
#尚子:　こんにちは。

磯部、しばし言葉を失う。

磯部:　実は初対面じゃないんですよ。
そう、以前、青山のお宅に…、ええ、少なくとも三度ほど、お邪魔させていただいたことがありまして。
尚子:　青山って、東京のお家のこと？
智泰:　磯部中佐殿は東京のご出身で。
庸子:　あら、道理で……。
磯部:　陸軍本部に勤務していた頃、私はお父様の部下だったんですよ。
ああ、なんとなく覚えてるような気がしますよ、皆さんのお顔……。
昌子:　いえ、でも、私たちはぜんぜん…。
磯部:　一番上のお嬢さんは、たしか、ドイツ留学中にお生まれになったと…。
庸子:　ええ、それが私です。
磯部:　お父様は本当に考えの進んだ方でした。お嬢様方にも高等教育を受けさせると…。
庸子:　それで、私たちみたいなお転婆娘になったんです。
尚子:　庸子お姉さんは、女子師範学校を卒業して、今は教鞭を…。
磯部:　それはすごい。
相馬:　*独身の女教師。
磯部:　ああ。たしか、息子さんもおられたでしょう……晃君でしたっけ？
尚子:　ええ。

庸子:　なんだか狐につままれたみたい。
東京でのことは、私、全部覚えてると思ってたのに…。
昌子:　わたし思い出した。
もしかして……片思いの少尉さん？
庸子:　え？
昌子:　ほら、いたじゃない、新米の若い将校さんが。
磯部:　そうそう。そんなあだ名で呼ばれたこともあったなあ。
いやあ、懐かしい。
昌子:　ほら、覚えてない？
あの頃、だれかに恋をして、夢中になってらっしゃった…。たしか女学生？
磯部:　いえ、女給でした、銀座の。
相馬:　*それは、それは。
昌子:　あの頃は、たしかこんな口ひげが…。
磯部:　そう、そう。
昌子:　触らせてもらったことがあるの、私。あの頃はまだ、こんな小学生で。
尚子:　大昔のことね。
庸子:　そうね、まだお母様が生きてらした頃。
磯部:　すっかりご無沙汰してしまって。
ああ、もっと早くご挨拶に伺うんでした。何の恩返しもできず、今になってこんな…。
庸子:　そんなことありません。こうやって来てくださっただけでも本当に…。
昌子:　なんて歳を取ってしまわれたんでしょう。
庸子:　昌子…。
磯部:　とにかく……謹んでお父様のご冥福をお祈り申し上げます。
庸子:　痛み入ります。

磯部が頭を下げると、三人姉妹も頭を下げて挨拶を返す。

磯部:　本当に残念です。
お母様がお亡くなりになった時も、お葬式に伺えず…。
尚子:　母は東京の染井霊園に。
磯部:　そう、本当に……儚いものだなぁ、人生は。

俯いていた昌子、泣き出す。

尚子:　　お姉ちゃん……。
磯部:　　ああ、私が余計なことを。
庸子:　　いえ。
　　ああ…、こちらは冬になると、ものすごく寒いんですよ。
磯部:　　覚悟してます。
　　寒さなら、仙台にいた頃、若干経験しました。
尚子:　　そんなの比べ物にならないわ。
庸子：　　あんた、仙台に行ったこともないくせに。

磯部、笑う。

磯部:　　思ったより違和感はないですね。ここはまあ、日本が作った軍都ですし。
　　むしろ生活水準は高い方なんじゃないですか？
智泰:　　ええ、そんなんです。かえって…。
#尚子　　そんなことないですよ。
相馬：　　外地のパラダイス！
磯部:　　問題は、こっちに来る時でした。
　　家内と娘二人がひどく船酔いして、清津港に下りる前から、ほとんど半病人になってしまって。
庸子:　　それはそれは…。

［第一幕 5場に続く］

（注）今回、日韓合作演劇の一例として、2020年末にKAATで上演された『外地の三人姉妹』の台本の一部を紹介した。
作家のソン・ギウン氏は今後、『カルメギ 가모메』『外地の三姉妹』を収録した多重言語演劇戯曲集の出版を計画している。